

遠隔，対面授業を組み合わせたカウンセリング教育

相模 健人

愛媛大学教育学部

Counseling Education through a Combination of Distance and Face-to-face Classes

Takehito SAGAMI

Faculty of Education, Ehime University

I. はじめに

2019年12月に中国湖南省武漢で確認された新型コロナウイルスは翌年より世界中において感染が拡がり、我が国にも大きな影響を及ぼしている（富士フィルムHP, 2020）。中でも大学教育においては2020年4月の日本政府の全国における緊急事態宣言を受け、多くの授業が遠隔授業とならざるを得なかった。

遠隔授業とは文部科学省（1997）によると「ア 現行の大学設置基準第25条の授業を、隔地の教室、研究室又はこれに準ずる場所において同時に行うものであること。（同一校舎内の複数の教室間を結んで行う場合や、送信側には教員のみがいて学生がいない場合も含む。）イ 多様な通信メディアを利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的かつ双方向に扱うことができる状態で行われるものであること。ウ 大学において、直接の対面授業に相当する教育効果を有すると認めたものであること」の要件を満たすものが適当であるとされている。このような遠隔授業について、青木（2005）はe-Learningの導入により、個々の学習スタイルにあった学習環境を提供し、学習者が自分の学習スタイルを認識して、それに見合った学習環境を選択することは、教育効果を最大限にするためにも重要な要素であると述べる一方、石田ら（2008）は教員が遠隔地の学生の反応まで斟酌することは困難とその難しさを述べている。

筆者が専門とする臨床心理学では対面でのカウンセリングが原則とされていたが、近年はオンラインによるカウ

ンセリングが行われている。メールによるカウンセリング（田村，2003）では書きことばで気持ちを表現することや転移感情や依存関係を生じさせず信頼関係を築くことが特徴であると述べている。また、中川，杉原（2019）は学生相談にオンラインカウンセリングを導入する中で、従来のカウンセリングによる支援が届かない学生に対して、支援につながる道を開く1つの方法であり、従来の対面のカウンセリングだけに応えきれない支援を補う方法と述べている。カウンセリングの効果についてはBarak et al.（2008）は14の研究で対面式とインターネットによる心理療法的介入を比較しても、効果に差は見られなかったことを報告しており、これからの発展が望まれる。

筆者も遠隔地とのネットカウンセリングの経験（相模，2011。長尾他，2011）があり、教育的な活用を行ってきた。遠隔地とのネットカウンセリングの経験をした大学院生の感想を検討することにより、対面のカウンセリングと比べて視線や話すタイミングといった話づらさ、雰囲気を感じ取ることの難しさや構造化に関しても違いを感じていることを考察している（相模，2011）。

筆者は所属する教育学部において「カウンセリング特別演習」というカウンセリングの面接練習を主とする通年授業を行ってきた。前述の新型コロナウイルスの影響で、この授業においても遠隔授業とならざるを得ず、前期と後期の一部においては遠隔授業を行った。コロナの影響が少し和らいだ後期においては一部、対面授業を行うことができた。

そこで本研究ではこの「カウンセリング特別演習」にお

ける遠隔授業から対面授業の授業形式がカウンセリングの面接練習として学生にどのような学習効果を及ぼしたかについて、学生の感想をもとに検討することとする。結果の検討には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 木下, 2003, 以下 M-GTA) を用いて分析を行った。

II. 授業について

1. 対象授業

筆者が教育学部において担当する「カウンセリング特別演習」の授業。通年2単位、4年生対象の授業である。教科書として「解決のための面接技法 [第4版] —ソリューション・フォーカストアプローチの手引き」(De Jong & Berg, 2016) を用いている。前期に大学院生のティーチングアシスタント (以下 TA) が10回参加している。

2. 従来の授業 (2019年度以前) と遠隔授業 (2020年度) を導入しての変更

授業内容について下記に記している。遠隔授業はビデオ会議システム「ZOOM」を用いて行った。具体的な比較は表1を参照していただきたい。

前期

①導入期 (従来は3回, 遠隔授業1回) …遠隔授業では初回, 2回目の授業がコロナ禍に伴い全学的に休講となったため, ガイダンスの1回となった。

②TAクライアント期 (6回) …TAにロールプレイとしてクライアント役を2種類 (児童生徒, 保護者) を演じてもらい, 面接練習を行う。1種類につき3回の授業をかけて1回分の相談を行う。従来の授業では受講学生がカウンセラーとして2人一組で5分, 面接練習を行い, その様子を録画したビデオを見ながら授業者とTAがコメント, アドバイスを行う。遠隔授業では受講学生と授業者がカウンセラーとして2人一組で8分, 面接練習を行い, 授業者

者とTAがコメント, アドバイスを行う。2人一組としたが, 受講学生の方で自主的に前半後半を4分ずつに分けて一人ずつ行っていた。従来, 遠隔授業ともに各回の授業後に課題として, 「授業を受けて気付いたこと」, 「それをカウンセリングに役立てるにはどんなことをする必要があるでしょうか」, 「授業を受けての質問」, の3つをメールで受講学生に送ってもらい, 授業者がコメントして返信した。以下, 課題は同様に行った。

③受講学生クライアント期 (約6回) …従来, 遠隔授業ともに受講学生に身近な悩みをクライアントとして相談してもらう。8分, 面接練習を行い, ビデオは見返さずに授業者とTAがコメント, アドバイスを行う。1回の授業で1回分の相談を行う。教員採用試験時等には休講している。

後期

後期は遠隔授業では10-12月は対面授業, 1-2月は大学の要請により遠隔授業となった。

④外部クライアント期 (14回) …後期は授業外の同級生, 後輩などにクライアントを頼んで身近な悩みを相談してもらう。8分の相談練習を行い, 授業者がコメント, アドバイスを行う。折を見て, 授業者の判断で1人5分の面接練習とする。1回の授業で1回分の相談を行う。遠隔授業では1-2月は外部クライアントを「ZOOM」に招待して行った。クライアント役が見つからない時は数回, 面接のDVDを視聴した。

⑤授業者クライアント期 (1回) …授業最終回は筆者がクライアントとなり, 従来のコメント, アドバイスなし, 受講者のみで1回の相談を行った。最終課題として, カウンセリングの自信を尋ねるものとして, 「この授業を受ける前を1, カウンセラーとして何とかカウンセリングができそうなものを10とするといくつでしょうか」, 「その答えは何を習得したから, ここまで上がっているのでしょうか」, 「その答えからほんの少し1上がったとしたら, 何を習得しているのでしょうか」, の3つをメールで受講学生に送ってもらい, 授業者がコメントして返信した。

表1 授業内容概要

学期	従来の授業	遠隔, 対面を組み合わせた授業
導入期	ガイダンス, 事例提示, テキストの付録DVDを用いた質問作成の練習。	ガイダンス1回のみ, 課題としてテキストを読み質疑応答, 遠隔授業。
前期	TAクライアント期	2人一組としたが, 受講学生の方で自主的に前半後半を4分ずつに分けて一人ずつ行う。他は同様, 遠隔授業。
	受講学生クライアント期	遠隔授業, 同様に行う。
後期	外部クライアント期	10-12月対面授業, 1-2月遠隔授業, 他は同様。
	授業者クライアント期	遠隔授業, 他は同様。

表2 調査内容

	質問内容
前期授業	(1)授業を受講しようと思った動機を教えてください (2)最初の授業を受けてみた感想を教えてください (3)最初に授業内でカウンセリングを試してみた感想を教えてください (4)遠隔でのカウンセリングで困ったところを教えてください (5)(4)に対してどう対応しましたか？ (6)遠隔でのカウンセリングで良かったことはどんなことでしたか？
後期授業	(7)対象授業での遠隔でのカウンセリングを行ったことについて思うことを書いて下さい (8)後期の授業において初めて対面でのカウンセリングを試してみた感想を教えてください (9)対面と遠隔で行うカウンセリングの違いは何だと考えますか？ (10)遠隔に比べて対面でのカウンセリングでの困ったことはどんなことですか？ (11)(10)に対してどう対応しましたか？ (12)遠隔に比べて対面でのカウンセリングで良かったことはどんなことでしたか？
授業全体	(13)初めて一人でカウンセリングに入ってみた感想を教えてください (14)最後に受講生だけでカウンセリングを行った感想を教えてください (15)対象授業を受講して得たものを教えてください (16)教師になることを踏まえて、対象授業をどのように活用しようと思いますか？具体的にお書き下さい (17)対象授業の改善点をお書き下さい (18)対象授業の感想を自由にお書き下さい

Ⅲ. 方法

1. 調査対象者

受講学生3名を対象に有効回答数3名を分析対象者とした。

2. 調査内容

研究目的に沿った調査項目を独自に作成した。具体的な調査内容は表2を参照されたい。最終授業回においてMicrosoft Formsを用いて、自由記述してもらった。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については筆者から最終授業回において研究目的を説明し、了解が得られたものを調査対象としている。結果、論文内容においても了解を得たものである。

4. 結果の分析

調査で得られた回答について、M-GTAを用いて分析を行った。分析テーマは学生が遠隔授業と対面授業を用いてカウンセリングの習得を行う過程、分析焦点者は対象授業を受けた学生とした。M-GTAの手順は、まず回答から分析ワークシートを用いて、説明概念を生成した。次に複数の概念からカテゴリーを生成、最後にカテゴリー相互の関係から結果図、ストーリーラインを作成し分析結果をまとめた。

Ⅳ. 結果

M-GTAの結果から、33概念と10カテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめて、簡潔に文章化し(ストーリーライン)、結果図を作成した。以下、概念を『』、カテゴリーを【】と表記する。

1. 各概念とカテゴリー

結果から一つ概念を例示する。調査結果から、受講学生は自身の相談された経験や心理学、カウンセリングに興味を持ち、受講に至っている。これらから、カウンセリングに興味を持ち、身につけたいと感じていることを共通点として、『カウンセリングを身につけたい』という概念を生成した(表3)。

さらに『カウンセリングを身につけたい』という概念を含み、『教員になったときに役立つ』という概念と合わせて、一つのカテゴリーを生成した。学生が対象授業を受講した理由を表わすものとして【受講動機】というカテゴリーを生成した(表4)。

このように、概念の生成・修正を繰り返し行い、それに合わせてカテゴリーも生成・修正を行った。3名分のデータ分析を終えた時点で最終確認を行い、理論的飽和に達したと判断し、最終的に33概念、10カテゴリーとなった。

表3 概念例『カウンセリングを身につけたい』

定義	カウンセリングに興味を持ち、身につけたい
ヴァリエーション (具体例)	わたしは前から友人に相談されることなどが多く、友人の悩みを聞くことで、友人の気が紛れたり、和らいだりする様子を見るのが好きだったので、カウンセリングというきちんとした方法を身につけたいと思い、受講しました。 心理学やカウンセリングに興味があったため。
理論的メモ	学生はカウンセリングに自分の経験から興味を持っている。

表4 カテゴリー例【受講動機】

定義	学生が本授業を受講した動機
概念名	概念1『教員になったときに役立つ』 概念2『カウンセリングを身につけたい』
理論的メモ	概念1：学生は受講動機として教員になったときに役立てたいという気持ちを持っている。 概念2：学生はカウンセリングに自分の経験から興味を持っている。

2. ストーリーライン (図1)

以下に示すのがM-GTAの最終的な結果となるストーリーライン及び結果図である。

学生は【受講動機】としてカウンセリングを学ぶことは『教員になったときに役立つ』と考えていたり、自分の経験から興味を持ち『カウンセリングを身につけたい』との思いから受講に至った。しかし学生には【授業への不安】があり、『カウンセリングの練習は不安』『クライアントへの質問が詰まってしまう』場面があり、教員の『助けがないと不安』と感じている。対面授業に移行しても『対面は緊張する』と続いている。これに対して【授業内容】として『教員の助言』『DVDを見た』『実践的で有効な授業』

効な授業』と考えている。

授業は遠隔授業から始まり、学生は『通信の問題』はあるものの、『遠隔では緊張感が低い』と感じ、『遠隔で練習することの利点』を感じている。学生は工夫して『学習スタイルの確立』がなされ、『遠隔から対面で良かった』といった【遠隔での学び】を行っている。さらに学生は『遠隔では会話のテンポが遅くなる』と感じ、普段の会話のテンポとは違う『会話の調整』といった【対話の対応】を行う。そのことで授業最終回において教員が『たくさん話すクライアント』であっても対応できている。そうして学生は面接実践を繰り返す中で基本姿勢など『カウンセリングを徐々に身につける』ことができ、『自分の課題が見えた』りして、やりがいを感じる。最後の授業では自分たち『学生だけで行った』ことで【実践での学び】が行えている。

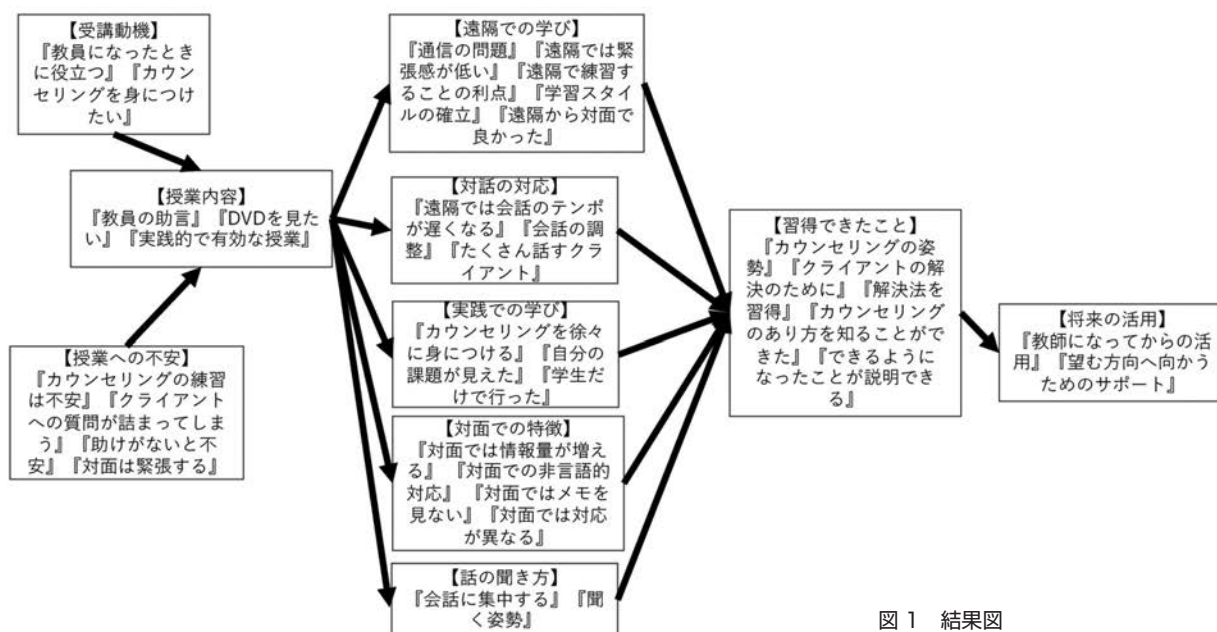


図1 結果図

後期の対面授業では学生は表情、仕草、雰囲気、感情など様々な『対面では情報量が増える』と感じ、『対面での非言語的対応』を行う。『対面ではメモを見ない』ようにし、『対面では対応が異なる』と【対面での特徴】を捉えている。遠隔授業、対面授業を経験することにより学生は『会話に集中する』ことの必要性を感じ、『聞く姿勢』『話の聞き方』を自分なりに習得している。

学生は授業を通して『カウンセリングの姿勢』を身につけ、学生は『クライアントの解決のために』なることを考えられるようになる。学生は新たな『解決法を習得』し、『カウンセリングのあり方を知ることができた』と感じ、『できるようになったことが説明できる』という【習得できたこと】を実感している。学生はクライアントなどが『望む方向へ向かうためのサポート』する方法を学んだことで『教師になってからの活用』といった【将来の活用】を考えている。

以上の結果をまとめたのが図1の結果図である。

V. 考 察

M-GTAの結果に基づき、考察を遠隔授業の利点、遠隔授業と対面授業の違いと移行、授業の学習効果について考えていきたい。

1. 遠隔授業の利点

対象授業では学部学生を対象とし、カウンセリングにおける面接練習は当然ながら初めての経験となる。以前に対面授業のみの対象授業を対象として行った研究(相模, 2014)においては初期の面接練習において「クライアントに巻き込まれるような感覚」、「緊張して、頭が真っ白になりました」といった結果が見られ、相当な緊張を学生が感じている。しかし、本研究の結果からは『カウンセリングの練習は不安』という似た概念はあるものの、『遠隔では緊張感が低い』という概念が生成されており、これは着目すべきことと考える。具体的には「対面だと、緊張感が凄いので、まずはウォーミングアップの意味も込めて遠隔で行い、基本の形ができてから対面で行っても良いと思います」(調査内容(7)に対する回答。以下、括弧内の数字は調査内容の質問を指す)といった意見が見られ、遠隔授業における面接練習がその導入として行える可能性が示唆された。

加えて受講学生はカウンセラー役とクライアント役の表情が見えるなどといった『遠隔で練習することの利点』を感じており、利点を活かして学習を行っていると考えられる。このように受講学生がカウンセリングの面接練習の初期に緊張感が少ないと感じていた理由として、対面授業と比べて得られる情報量が低いことが考えられる。対面授業に移行した後の概念として『対面では情報量が増える』が

生成されており、具体的な回答として「クライアントの表情や仕草を見ながらカウンセリングをすすめることができ、遠隔でするよりも情報量が増えたと感じた」(8)といったものがあり、単純に考えても遠隔、対面授業ではパソコン画面の一部と等身大の違いによる非言語的情報の違いが考えられる。同じくパソコン画面に映っているのも上半身のみであり、そこから得られる情報も少ない。

そうした情報量が限定されていることが、対面授業でのより多くの情報から判断して面接を行っていかねばならないことと比べ、遠隔授業では『遠隔では会話のテンポが遅くなる』『会話の調整』といった概念に見られるような会話での対応が主となり、そのやり取りを中心に学ぶことになる。これらのことから緊張感が低く、落ち着いて面接練習が行えると考えられる。

こういった緊張感の低さは『学習スタイルの確立』と関係し、具体的には「そのためか、慣れるまでは教科書を見返したり、マーカーや付箋をはって見返せるようにする自主学習の時間を保つことができました」(18)といった遠隔授業での面接練習における学習スタイルを自ら生み出している。学習スタイルを自ら生み出していることは前述したように言われている(青木, 2005)。このようなカウンセリングの面接練習という、従来、対面を主としてしか考えられないものであっても、同様に学生が工夫して学習スタイルを生み出していると考えられる。宮本(2003)は臨床心理面接の学習にマルチメディアを用いることを提案して、各学習者が自分なりの視点をもって面接を主体的・批判的に観察、分析することや各自の観察・分析結果を持ち寄り、指導者も交えた比較検討を通して、相互の認識を深めていくことを目的としており、このような受講学生が各自の視点を持ち、それを後述する授業者のフィードバックを踏まえて認識を深めていくことが重要と考えられる。

このようなことから受講学生は『遠隔から対面で良かった』と感じていることがある。受講学生も具体的な回答として「遠隔にも良いところはありますが、実際に社会に出てからカウンセリングのようなものを行う際には対面であると思うので、遠隔と対面のバランスをよくするとよいと思いました」(7)という遠隔と対面の授業のバランスをとることが課題と考えられるが、遠隔授業をカウンセリングの面接練習の導入として会話や応答の練習として用いることの可能性が示唆されたと言える。

2. 遠隔、対面授業の違いと移行

では、カウンセリングの面接練習において、このような遠隔授業の導入から対面授業にどのように移行していけばよいのだろうか。それについて【対面での特徴】を中心に考えていきたい。

遠隔と対面の授業の違いとして1.にも述べた情報量の違いが考えられる。前述の『対面では情報量が増える』に

加えて受講学生は『対面では対応が異なる』と感じている。具体的には「対面だと目があったり合わなかったり、雰囲気なんとなく暗くなったりすることが肌で感じ取ることができますが、遠隔の場合そういうところに鈍感になると考えます」(9)と遠隔授業との違いを感じている。このことは前述の筆者の研究(相模, 2011)から指摘されており、遠隔から対面の授業に移行することで、このような非言語的な細やかな対応が求められると言える。このことから受講学生はこれまで遠隔授業で培った学習スタイルを捨て、より実践的な面接対応を対面授業で行うことになる。具体的には『対面ではメモを見ない』『対面での非言語的対応』といった対応となり、情報量が増えたことへの対応を行っていくことになる。

このような遠隔と対面授業の違いを踏まえ、バランスのとれた学習を行うには授業者の対応が必要となると考えられる。中でも『教員の助言』は従来の授業から行われているが、有効な手立てであると考えられる。具体的には「毎回ここはもう少しだったけど何何は良かった、とすぐにフィードバックをいただくことも大学の授業では新鮮で、自然とやる気につながっていたように感じました」(18)といった面接練習によるフィードバックを常に行うことで、受講学生は自らの面接練習での対応を微調整し、学んでいったと考えられる。筆者は大学院ではチームアプローチを用いた相談実習を行っているが、この実習を受けた大学院生の感想の検討(相模, 2010)よりこのようなフィードバックについて「安心感がある」といった結果があり、対象授業についてもフィードバックの有効性が考えられる。

このことは『自分の課題が見えた』と関連していると考えられ、具体的には「緊張感やその場で流れなど、話を聞きながら考えて話したり、クローズになってしまうなどといった自分の課題が見えてきやすかった」(12)といった形で自分の課題を見つけ、それを改善するように授業に意欲的になっていくと考えられる。

こうしたことから受講学生は『実践的で有効な授業』と考えており、具体的に「教師になるにあたって、大学4年間の授業の中で最も実践的で有効な授業だったように感じた」(18)といった回答があり、受講学生に授業が役立っていることが考えられる。

3. 授業の学習効果

こうした過程を経ての対象授業での学習効果を【習得できたこと】を中心に考えていきたい。1年間という長期での面接練習を繰り返す内に受講学生は『カウンセリングの姿勢』を身につけて具体的には「全体的にはまずはクライアントさんとしっかり話をしようと心掛けて、カウンセリングの基本を見失わないようにしながらとりあえずやってみることで対応できたと思います」(11)といった意見が見られ、カウンセリングの姿勢を学んでいる。これと近接

した概念に『クライアントの解決のために』があり、「自分の感覚だけではなくてカウンセリングの基本に沿って話を聞くことができるので、むやみに話を聞くのではなく解決のために自分ができることがあると思えるようになりました」(15)といったクライアントの解決を中心とした考え方ができるようになる。永田他(2009)は学部でのカウンセリング実習を通して、学生がどうすることが相手に望ましいのかを相対化して理解できるようになることを考察しているが、同様の学習効果が遠隔授業を一部、用いても行えたと考えられる。

こうして『カウンセリングのあり方を知ることができた』『解決法を習得』といった概念から『できるようになったことが説明できる』といった意図まで説明できるようになる。受講学生の【将来の活用】のような身につけたカウンセリングマインドを活かしていこうとしている。遠隔、対面授業を組み合わせることにより、従来の授業より受講学生の負担をより減らしたカウンセリングの面接練習ができると考えられる。

4. 今後の課題

本研究の限界として、受講学生全員を調査対象者としたものの、それでも3名であったことから多様な意見を対象とできたとはいえず、より多くの調査対象者が必要と考えられる。さらに遠隔授業と対面授業の緊張の違いについて質問紙などを用いて調査することも考えられる。

本研究を発展して、遠隔、対面授業のあり方について研究し、よりよいカウンセリング教育について提案したいと考える。

付記

本研究の一部は日本心理臨床学会第40回大会Web大会で発表されました。

引用文献

- 青木久美子(2005)「学習スタイルの概念と理論 - 欧米の研究から学ぶ」『メディア教育研究』2(1), 197-212.
- Barak, A., Hen, L., Boniel-Nissim, M., Shapira, N. (2008) "A Comprehensive Review and a Meta-Analysis of the Effectiveness of Internet-Based Psychotherapeutic Interventions" *Journal of Technology in Human Services* 26, 109-160.
- De Jong, P. & Berg, I. K. (2016) "Interviewing for solutions, 4th Edition" Wales, Brooks /Cole, Cengage Learning. 桐田弘江・玉真慎子・住吉祐子訳(2008)『解決のための面接技法：ソリューション・フォーカスト・アプローチの手引き 第4版』金剛出版
- 富士フィルム HP (2020)「新型コロナウイルスとは？ 新型コロナウイルスの感染・予防について」『富士フィルム HP』

- https://sp-jp.fujifilm.com/hydroag/column/019jokin_corona-virus.html (2021年9月20日確認)
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 - 質的研究への誘い』 弘文堂
- 石田三樹, 越智泰樹, 奥田麻衣 (2008) 「WebCT を活用した遠隔授業の成果」『教育システム情報学会誌』 25 (4), 403-413.
- 宮本友弘 (2003) 「マルチメディアの活用」倉光修・宮本友弘 編著 『マルチメディアで学ぶ臨床心理面接』 誠信書房, 169-200.
- 文部科学省 (1997) 「『遠隔授業』の大学設置基準における取扱い等について (答申) (平成9年12月18日大学審議会)」『文部科学省 HP』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/075/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2017/01/05/1380914_06.pdf (2021年9月20日確認)
- 長尾秀夫, 相模健人, 荏田知則, 山口充, 都筑伸二 (2011) 「ICT教育相談場面を活用した大学院生の教育相談力の育成」『大学教育実践ジャーナル』 9, 83-87.
- 永田法子, 野副紫をん, 立川知美, 長尾佐和子 (2009) 「学部教育におけるカウンセリング実習」『中京大学心理学研究科心理学部紀要』 8 (2), 1-7.
- 中川純子, 杉原保史 (2019) 「学生相談におけるオンラインカウンセリングの可能性 - ビデオ通話・音声通話・テキストによる心理相談の試験的導入 -」『京都大学学生総合支援センター紀要』 48, 19-32.
- 相模健人 (2010) 「臨床心理面接技法習得にチームアプローチを用いた学習効果に関する研究 -KJ法を用いて-」『愛媛大学教育学部紀要』 57, 33-43.
- 相模健人 (2011) 「ICT教育相談活動における利点と課題: 学生の感想をもとに」『愛媛大学教育学部紀要』 58, 55-58.
- 相模健人 (2014) 「学部教育におけるカウンセリング技法の習得に関する研究 - 学生の感想から -」『愛媛大学教育学部紀要』 61, 51-56.
- 田村毅 (2003) 『インターネット・セラピーへの招待心理療法の新しい世界』 新曜社, 139-152.

